3-49「第四九章　生産過程の分析のために」

　エンゲルスは、『資本論』第三部の「序文」で次のように述べています。
「最後に第七篇は完全に書き上げられてはいたが、ただ最初の草案でしかなく、印刷のできるものにするためには、まずその果てしなくもつれあったいくつもの章句を分解しなければならなかった。」

「第四九章」の抜粋

※「抜粋」文に「番号」と「タイトル」の付いている文章は、ホームページ５「温故知新」「１、マルクス・エンゲルスの大事な発見」のマルクス・エンゲルスの著作の抜粋ページ「A」から「J」で紹介してある文章です。

　「利潤〈企業者利得・プラス・利子〉と地代は、商品の剰余価値の別々の部分がとる特有な形態にほかならない。」(P1066)及び「収入の第三の独特な形態をなしている労賃は、つねに資本の可変部分に等しい。」(P1067)こと、「年間生産物の価値は、労賃・プラス・利潤・プラス・地代・プラス・Cに等しい」ことを述べ、単純再生産の表式(第二部第二〇章第二節)によって再生産過程の説明をします。

　続けて、総生産物の内訳と総収入の内訳の説明をし、

P1076

「これに反して、セー氏に見られるような、全収益、総生産物は、一国にとっては純収益になってしまうとか、それと区別されないとかいう幻想、つまり、このような区別は国家的立場から見ればなくなってしまうという幻想は、ただ、アダム・スミス以来全経済学を一貫している次のようなばかげた説の必然的で最後の表現でしかないのであって、その説によれば、諸商品の価値は結局は残らず諸収入に、つまり労賃と利潤と地代とに、分解するというのである。」(P1076)、と言います。

P1079-1083

「このようなまちがった明らかに無理な分析に至らせる困難は、要するに次のようなものである。

　(1)不変資本と可変資本との根本関係、したがって剰余価値の性質、したがってまた資本主義的生産様式の全基礎が理解されていないということ。……

〈注53の最後の言葉〉ブルジョア世界のなかに、ありとあらゆる世界のうちの最良の世界を発見しようとする親切な善意が、俗流経済学では、真理愛や科学的探究欲のどんな必要にもとって代わるのである。

　われわれはこの分析を第二部第三篇で与えておいた。

　(2)労働が、新たな価値をつけ加えることによって、古い価値を、この価値を新たに生産することなしに、新たな形態で保存するその仕方だ理解されていないということ。

　(3)再生産過程の関連が、個別資本の立場からではなく総資本の立場から見た場合に、どのように現れるか、ということが理解されていないということ。」

　(4)ところが、さらに一つの困難が加わってきて、それは、剰余価値のいろいろな成分が互いに独立ないろいろな収入の形で現れるようになれば、いっそうひどくなるのである。すなわち、収入と資本という固定した規定が入れ替わってその位置を変え、したがって、それらはただ個別資本家の立場からの相対的な規定でしかなくて総生産過程を見渡す場合

には消えてしまうかのように見える、という困難である。……そこで、アダム・スミスとともに、不変資本はただ商品価値の一つの外観上の要素でしかなく、この要素は全体の関連のなかではなくなってしまう、と考えることもできる。……

(5)……商品の価値が基礎だということは忘れられてしまう。……

これこそは、われわれが次の章で考察しようとする取り違えであって、この取り違えは、必然的に、価値がそれ自身の諸成分から発生するかのような外観と関連しているのである。……すなわち、商品の価値は労賃、利潤、地代の価値総額から生じ、そして労賃、利潤、地代の価値はそれ自身また商品の価値によって規定されている、という繰り返しになるのである。」（P1079-1083）

P1085〈**25-6 資本主義的生産様式の解消後の剰余労働のあり方**〉

「それ（保険財源としての剰余価値の一部分――青山）はまた、剰余価値および剰余生産物のうちの、つまり剰余労働のうちの、蓄積のために、すなわち再生産過程の拡大のために役立つ部分のほかに、資本主義的生産様式の解消後にも存続せざるをえないであろうただ一つの部分でもある。このことは、もちろん、直接生産者によって規則的に消費される部分が現在のような最低限度に制限されてはいないであろうということを前提する。年齢から見て、まだ、またはもはや、生産に参加できない人々のための剰余労働のほかには、労働しない人々を養うための労働はすべてなくなるであろう。」（大月版『**資本論**』⑤ P1085F7-11）

P1086-1088

「すべての新たな資本は利潤や地代やその他の収入形態から、すなわち剰余労働から生ずるという事情は、商品の全価値が収入から生ずるというまちがった観念をもたせるようになる。……

……しかし、前年から受け継がれた古い不変資本は、その価値から見れば、新たに追加される労働によって再生産されるのではないのである。

……利潤の資本への転化が意味するものは、超過労働の一部分が新たな追加生産手段の形成に充用されるということにほかならない。これが利潤の資本への転化という形で行なわれるということは、ただ、労働者がではなく資本家が超過労働を自由に処分することができるということを意味しているだけである。」

P1090〈**25-8 資本主義的生産様式の解消後の価値規定の重要性**〉

「第一に、その生産様式が価値にもとづいており、さらに進んでは資本主義的に組織されている一国を、ただ国民的欲望のためにだけ労働する一つの全体とみなすことは、まちがった抽象である。

第二に、資本主義的生産様式が解消した後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味では、やはり有力に作用するのである。」（大月版『**資本論**』⑤ P1090B5-1）※「第一に、」の部分は「8-18」に重複掲載。

「第四九章」の概要と現代の私たちが留意すべき点

「第四九章　生産過程の分析のために」は「第四八章　三位一体的定式」でおこなった「三位一体的定式」の「まちがった外観と偽瞞」の暴露の続きとして、「セー氏に見られ

るような、全収益、総生産物は、一国にとっては純収益になってしまうとか、それと区別されないとかいう幻想、つまり、このような区別は国家的立場から見ればなくなってしまうという幻想は、ただ、アダム・スミス以来全経済学を一貫している次のようなばかげた説の必然的で最後の表現でしかないのであって、その説によれば、諸商品の価値は結局は残らず諸収入に、つまり労賃と利潤と地代とに、分解する」（P1076）という「三位一体的定式」に幻惑された考えの誤りの原因と私たちが中心に置くべきテーマについて論及したものです。

「第四九章」は、「第四八章」で明らかにしたように、「利潤〈企業者利得・プラス・利子〉と地代は、商品の剰余価値の別々の部分がとる特有な形態にほかならない」こと、「収入の第三の独特な形態をなしている労賃は、つねに資本の可変部分に等しい」こと、「年間生産物の価値は、労賃・プラス・利潤・プラス・地代・プラス・Cに等しい」ことを述べ、単純再生産の表式(第二部第二〇章第二節)による再生産過程の説明をし、続けて、総生産物の内訳と総収入の内訳の説明をします。

「これに反して、」上記のような誤った考えに至る原因は、「要するに次のようなものである」として、次の五点を挙げます。

(1)不変資本と可変資本との根本関係、したがって剰余価値の性質、したがってまた資本主義的生産様式の全基礎が理解されていないということ。

(2)労働が、新たな価値をつけ加えることによって、古い価値を、この価値を新たに生産することなしに、新たな形態で保存するその仕方だ理解されていないということ。

(3)再生産過程の関連が、個別資本の立場からではなく総資本の立場から見た場合に、どのように現れるか、ということが理解されていないということ。

(4)剰余価値のいろいろな成分が互いに独立ないろいろな収入の形で現れるようになり、収入と資本という固定した規定が入れ替わってその位置を変え、それらはただ個別資本家の立場からの相対的な規定でしかなくて総生産過程を見渡す場合に、不変資本はただ商品価値の一つの外観上の要素でしかなく、この要素は全体の関連のなかではなくなってしまうかのように見えること。

(5)商品の価値は労賃、利潤、地代の価値総額から生じ、そして労賃、利潤、地代の価値はそれ自身また商品の価値によって規定されているという、価値がそれ自身の諸成分から発生するかのような外観と関連して、商品の価値が基礎だということは忘れられてしまうこと。

このような事情から、「すべての新たな資本は利潤や地代やその他の収入形態から、すなわち剰余労働から生ずるという事情は、商品の全価値が収入から生ずるというまちがった観念をもたせるようになる。」

しかし、「前年から受け継がれた古い不変資本は、その価値から見れば、新たに追加される労働によって再生産されるのではない」こと、そして、「利潤の資本への転化が意味するものは、超過労働の一部分が新たな追加生産手段の形成に充用されるということにほかならない。これが利潤の資本への転化という形で行なわれるということは、ただ、労働者がではなく資本家が超過労働を自由に処分することができるということを意味しているだけである」こと。

だから、「三位一体的定式」の「まちがった外観と偽瞞」に騙されることなく、資本主

義的生産様式の社会の経済をしっかり学んで、「第一に、その生産様式が価値にもとづいており、さらに進んでは資本主義的に組織されている一国を、ただ国民的欲望のためにだけ労働する一つの全体とみなすことは、まちがった抽象である」ことを国民に明らかにし、「第二に、資本主義的生産様式が解消した後にも、社会的生産が保持されるかぎり、価値規定は、労働時間の規制やいろいろな生産群のあいだへの社会的労働の配分、最後にそれに関する簿記が以前よりもいっそう重要になるという意味では、やはり有力に作用するのである」、だから、そのことを踏まえ、〝国民の新しい共同社会〟づくりは、国民福祉のための社会的労働の配分を正しく行なうための記帳と統制の民主的制度をしっかりと創らなければならない。

「第四九章　生産過程の分析のために」は、私たちにこのようなことを明らかにし、注意喚起をしているのではないでしょうか。

なお、〈注 53 の最後の言葉〉「ブルジョア世界のなかに、ありとあらゆる世界のうちの最良の世界を発見しようとする親切な善意が、俗流経済学では、真理愛や科学的探究欲のどんな必要にもとって代わるのである」は、２１世紀になって「資本主義観の大転換」と「革命観の大転換」を成し遂げた不破さんのことを言っているように思えてなりません。